

## Syntactical Ambiguityについて(2)

### — 英語曖昧表現の諸相 IV —

中野清治

(平成6年10月26日受理)

#### 要 旨

前稿において、英語表現の文レベルでの曖昧さを、多義構文、前置詞句付加、疑問詞の機能の三つの面から考察してみた。英語の統語上の曖昧さは、上記に加えて、他の様々な要因によって引き起こされる。たとえば、数量詞や否定辞の作用域と焦点、数量詞同志あるいは数量詞と否定辞との相互作用、比較表現における比較対象の曖昧さ等がそうした要因として挙げられる。さらに、文中の語が関係詞か接続詞かという問題もある。本稿では、そうした要素を含んだ文の曖昧さを、再び文のレベルで検討してみる。

#### キーワード

曖昧(性)、数量詞、作用域、比較表現、痕跡、優先読み、否定表現、関係

#### <承 前>

- 1 はじめに
- 2 多義構文
- 3 前置詞句付加
- 4 疑問文/疑問詞

(61)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Some} \\ \text{All} \\ \text{Five} \end{array} \right\}$  of the boys told me a story.

(a) 私は  $\left\{ \begin{array}{l} \text{いく人かの} \\ \text{すべての} \\ \text{5人の} \end{array} \right\}$

少年からそれぞれ異なった話を別々に聞いた。

#### 5 数量詞

数量詞someは(a)不定の数量を表す基本的な用法と、(b)headwordであるNに属する集合のある部分を表す量記号的な用法とがある。

(b) 私は  $\left\{ \begin{array}{l} \text{いく人かの} \\ \text{すべての} \\ \text{5人の} \end{array} \right\}$

少年から同じ一つの話をも別々に聞いた。

(59) Some people are sick.

- (a) 病気が何人かいる。[発音は[sm]]
- (b) ある種の人たちは具合が悪い。

(c)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{いく人かの} \\ \text{すべての} \\ \text{5人の} \end{array} \right\}$

(60) I want some apples.

- (a) りんごをいくつか欲しい。
- (b) ある種のりんごが欲しい。

少年が同じ話を一緒になって話してくれた。

数量詞のついたNPが表す集合の各メンバーに対応して、その数量詞の作用を受ける不定のNPが異なった指示物をあらわすという解釈が可能なので、曖昧性が生じる。上記の文は、someの作用域に含まれるもの〔( )内に示す〕に応じて、三通りの読みが可能である(太田:53, 村木・斎藤:156)。

- (a) the boys, me, some (told, a story)  
 (b) the boys, me, a story, some (told)  
 (c) the boys, me, a story, told, some ( )

別々の話を皆が異口同音に話すことは不可能なので(d)は不可である。

\* (d) the boys, me, told, some (a story)  
 また(61)を受動態にすると、a storyはsome (all, five)の作用を受けないので、「同じ一つの話」という意味にしかとれない。

Cf. A story was told me by some (all, five) of the boys.

異なった数量詞が重複して用いられると、特定性や作用域がからんできて、曖昧性を生じる。

- (62) I told three of the stories to many of the men.  
 (a) 同じ三つの話を同じグループの多くの人にした。〔両方とも特定〕  
 (b) 特定の三つの話を多くの人〔不特定〕にした。
- (63) I told many of the men three of the stories.  
 (a) 同じ三つの話を同じグループの多くの人にした。〔両方とも特定:(62a)に同じ〕  
 (b) 特定のグループの多くの人に、(組み合わせが異なる)三つの話をした。

二つの数量詞のうち、左側に位置する数量詞を含むNPが「特定の人、もの」を表す。上記二つの例文は与格交替変形を適用する前後で意味が変わることを示している。(村木・斎藤:157)。

- (64) Every man loves some woman.  
 (a) For every man, there is some woman such that he loves her.  
 (すべての男性はだれかある女性を愛する)  
 (b) There is some woman who every man loves.  
 (すべての男が愛するような女性がいる)  
 Every manの作用域の中にsome womanが含まれると解釈すれば(a)の意味に、some womanの作用域の中にevery manが含まれると解釈すれば(b)の意味になる。(64)は(a)の意味に解されるのが普通であるが、受動態になると(b)の読みが普通である(太田:70,81)。Cf. Some woman is loved by every man.

数量詞を含む表現は集合的読み(Collective reading)と個別的読み(Individual reading)もしくは配分的読み(Distributive reading)が可能のため、曖昧性が生じる。

- (65) The three students could lift the desk.  
 (a) The three students together could lift the desk.  
 (b) Each of the three students could lift the desk.
- (66) Three students could lift the desk.  
 (a) A group of three students could lift the desk.  
 (b) There were three students who could lift the desk.
- (67) All of the boys carried the piano upstairs.  
 (a) 皆が協力してピアノを2階に運んだ。  
 (b) 一人一人が単独で運んだ。
- (68) Five rabbits washed a rock.  
 (a) 5匹のうさぎが〔2-3,1-4,2-2-1の組み合わせで〕一つの石を洗った。  
 (b) 5匹のうさぎがそれぞれ石を洗った。  
 (68a)について安井(321)はvagueな(漠然としている)だけであって、ambiguous

ではないとしている。いずれにしても(68)は集合読みと個別読みが可能で、その限りでは曖昧であるということ是可以する。

数量詞を含む文の受動態は ‘theme’ と ‘rheme’ の関係が変わるので、その意味は元の文と異なる。

(69)(a) Every member speaks two languages.

会員はみんな2か国語を話す。[2か国語はいろいろな組み合わせが可能]

(b) Two languages are spoken by every member.

すべての会員が話せる言葉が2か国語ある。[特定の二つの言語]

(70)(a) Many people read few books.

=There are many people who read few books.

(b) Few books are read by many people.

=There are few books which are read by many people.

主題になるものは特定のものであるから、態の変換によって主語(主題)が変わるということは、その文の意味に差異が生じてくるということになる。本節の数量詞表現とは直接的に関係があるわけではないが、次のように話者評言副詞を含む文を比較すれば、受動変形によって意味が変わることは、容易に理解できるであろう。

(71)(a) The doctor cleverly has examined John.

医者は賢明にもJを診察した。(The doctor is clever.)

(b) John cleverly has been examined by the doctor.

Jが医者に診てもらったのは賢明だった。(John is clever.)

## 6 比較表現

同等比較表現の否定<not so~as>は、前提が曖昧である。

(72) Mary is not so old as John.

(a) Mary is not as old as John.

(b) Mary is not so old as John.

(a)は無標の読みであって、notに強勢が置かれ、Maryが4歳、Johnが6歳のような場合にも、またMaryが82歳、Johnが85歳のような場合にも用いられる。つまり、‘Mary is old. John is old’を前提としてはいない。(b)は‘Mary is old. John is old’を前提とした解釈で、soに強勢が置かれる(太田:444)。

上記のような違いにより次のような相違が生じる。

(73)(a) Little Mary is not as tall as a pygmy.

\* (b) Little Mary is not so tall as a pygmy.

(73b)が非文なのはa pygmyがtallであるという前提がおかしいからである。

(74) John knows a kinder person than Bill.

(a) Bill may be kind but John knows a person who is kinder.

(JはBよりももっと親切な人を知っている)

(b) John knows a kinder person than Bill does.

(JはBが知っている人よりももっと親切な人を知っている)

(75) He loves the dog more than his wife.

(a) He loves the dog more than he loves his wife.

(b) He loves the dog more than his wife loves the dog.

(75)原文のhis wifeの代わりに代名詞を使うならば、(a)の場合はher、(b)の場合はsheを用いて区別できるが、herを用いた場合、(b)の意味を表すこともできるので(thanの後ではsheよりもherが好まれる)、必ずしも区別が容易というわけではない。

(76) I know more attractive women than Annie.

(a) I know a greater number of attractive women than (the number of) attractive women Annie knows.

[ more=\* more many ]

(b) I know women who are more attractive than Annie (is)(attractive).

[ more=Degree adverb ]

(77) I expected nothing less than a cynical remark.

(a) 皮肉ぐらひは言われるだろうと覚悟していた。[ nothing=Adv. less=N. ]

(b) まさか皮肉を言われようとは思わなかった。[ nothing=Pron. less=Adv. ]

COD<sup>4</sup> (sv. less) によれば、現在では(a)の方が普通の意味である(田桐:281)。

否定語と比較級が組み合わさった上記のような文は英語学習者泣かせであり、どうしてそのような意味になるのか論理的に考えてみても容易に納得がいかず、結局、“鯨の構文”などと称して丸暗記してしまうことになる。(77)などはまさにその類で、さすがのOEDも「nothingが副詞なのか不定代名詞なのかを述べることはしばしば不可能である」と匙を投げている。ただし、同書は“The combination *nothing less than* has two quite contrary senses”と明確に述べ、同じ例文を挙げているわけではないが、(a)は‘quite equal to, the same thing as’の意味、(b)は‘far from being, anything rather than’の意味だと説明している(sv. less: A. II. 7.b., B. 3.)。

最上級を用いた表現においては、比較の対象が曖昧であったり、mostが強意詞として用いられたりすることがあるので、曖昧さを生み出す。

(78) The rioting was not the worst in New Jersey.

(a) The rioting was not the worst in New Jersey ; it was worse in New York.

(暴動が一番ひどかったのはNJではなかった)

(b) The rioting was not the worst in New Jersey's history.

(その暴動はNJ史上最悪のものではなかった)

(79) This flower is most beautiful.

(a) This flower is the most beautiful (of all).

(b) This flower is very beautiful. [most=very: Intensifier]

(80) Of all the people in the class, John greeted Mary the most warmly.

(a) John greeted Mary more warmly than the rest of the people in the class did. [原文のJohnに強勢を置いた場合]

(b) John greeted Mary more warmly than he did the rest of the people in the class. [原文のMaryに強勢を置いた場合]

(80)は(81)から〈of-phrase〉を前置することによって得られるものだが、(81)には(80b)の意味しかない。

(81) John greeted Mary the most warmly of all the people in the class.

ところが、(81)を受動変形した(82)には(80a)の意味しかない(村木・斎藤:190f.)。

(82) Mary was greeted by John the most warmly of all the people in the class.

## 7 関係詞か接続詞か

いわゆる‘It ... that’の構文でも、異なった文脈の中では、異なった構造分析と意味解釈が必要となる。

(83) It's the woman that [ who ] cleans the house.

(a) それは家を掃除してくれる女です。

(b) 家を掃除するのはその女の人です。

(83a)は“Who’s that?”に答える文で、限定節を含む文と解釈する。Itは前方照応の代名詞であり、houseに強勢を置く。(83b)は例えば，“Who cleans the house, the man or the woman?”に答える文で、womanに強勢を置く分裂文である。

(84) It frightened the child that Ross wanted to visit the lab.

(a) That Ross wanted to visit the lab frightened the child. [Cleft analysis]

(b) The child, whom Ross wanted to visit the lab, was frightened by X.

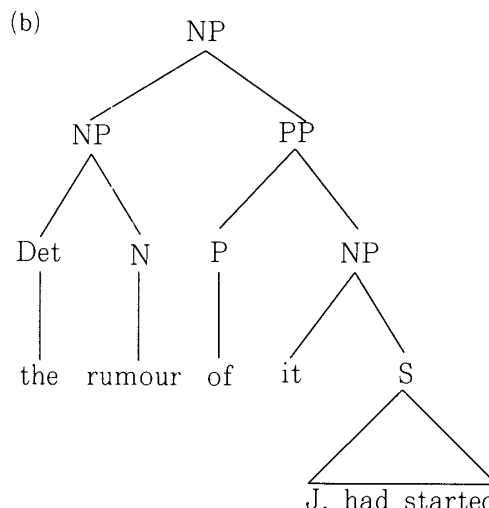
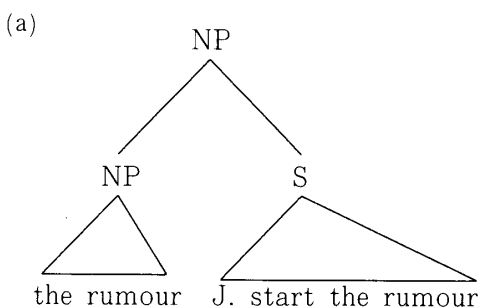
(c) To visit the lab frightened the child that Ross wanted. [Cleft analysis]

(84b)のXは談話の中で焦点となっている事柄であり、関係詞繰上げ変形による痕跡がwantedの後にあるとする解釈である。(84c)の解釈は理論的には可能だが、この読みには抵抗があるといわれている(Hirst: 147)。

(85) Mary believed the rumour that John had started.

(a) MはJが言い出した噂を信じた。  
[that=Relative pronoun]

(b) MはJが出発したという噂を信じた。  
[that=Conj.]



(86) Those are the boys that the police debated about fighting.

(a) The police debated (among themselves) about fighting the boys.

(b) The police debated with the boys on the topic of fighting.

(86)の関係詞節内に痕跡として関係詞が入り得るギャップは次の二か所である。

Those are the boys that the police debated△about fighting△.

‘Debate’は次の二つの構造をとるが、(b)よりは(a)の方の構造を好んで取る傾向があるので、上記の「警察が自分たちの相手として闘うことを論じたのはあの少年たちだ」という(a)の読みが一般的である(Hirst: 156)。

(a) [Agent debate about Object]

(b) [Agent debate Patient about Object]

関係詞節が含まれない(87)についても同様のことが言える。

(87) Which boys did the police debate △ about fighting △?

これに対して‘warn’は下記の(a)の構造を好んで取る動詞なので、(88)は曖昧な文ではあるが、どちらがより一般的な意味かは明確である。

(a) [Agent warn Patient about Object]

(b) [ Agent warn about Object ]

(88) Those are the boys that the police warned about fighting.

(86)~(88)で動詞が好んで取る構造 (Lexical preference) について触れたが、そのことと幾分関係のある最終予期項 (Final Expected Argument) について一言しておきたい。それは、異なった動詞が同じ構造 (型) で用いられたときに、誤って解釈するのを避けるのに役立つからである。

(89) The tourists objected to the guide that they couldn't hear.

( [ Agent object to Patient ] が好んで用いられる型)

(90) The tourists signaled to the guide that they couldn't hear.

( [ Agent signal Patient Message ] が好んで用いられる型)

(89)ではguideが最終項である故、that 以下は関係詞節と解釈されるのであるが、(90)ではguideは最終項ではないので、that 以下は文の補文と解釈しなければならない。とはいっても、次の例のようにLexical preferenceで事がすべて解決するわけではない。

(91) The tourists signaled to the guide that they didn't like.

Lexical preference (今の場合、[ signal Patient Message ] の型) で読むことがうまくいかないとき、読み手はSyntactical preferenceの手順を援用することになるであろう。(91)の<that-節>は補文ではなく、関係詞節と取らざるを得ないのである。

語の文法機能を語順に頼らざるを得ない英語では、このような再解釈ないし再分析を余儀なくされる文に出くわすことはままあることである。(91)のような文は 'Garden-path sentence' (袋小路文) と呼ばれ、人を迷わせる文ではあるが、曖昧ではない。

(92)(a) The cotton clothing is made from

comes from Mississippi.

(b) The horse raced past the barn fell.

最後に語類範疇が曖昧であるために、その語を含む文が構造的に曖昧になる例を挙げておこう。

(93) The Japanese push bottles up the Chinese.

(a) 日本軍の大攻勢が中国軍を抑えこむ。

(b) 日本側は中国側に酒を押しつける。(?)

## 8 否定表現

否定辞を含む文は、その作用域及び焦点を特定する段階で曖昧性が生じ、さらに数量詞や頻度の副詞が否定文中に用いられると意味解釈が著しく複雑になってくる。この問題を余すところなく扱っているのは太田 (1980) で、以下の例文も大半は同書から借用したものである。

### 8.1 not の作用域

(94) John didn't see a misprint.

(a) Jが見逃した誤植が一つあった。

[ a misprint は specific ]

(b) Jには誤植が見つからなかった。

[ a misprint は non-specific ]

仮に上記の英文が肯定文であっても、目的語になっている不定NPは二様に解せられるので、このNPは否定辞の作用を受けていないと考えられる。

(95) Fred doesn't write poetry in the garden.

上記の下線部は not の作用域の中にあり、それらをいずれも焦点として not に連合させることができる。もちろん、この連合がすべて等しく普通に用いられるわけではないが、いま仮に Fred が焦点になっているとすれば、次の二様に解せられるであろう。

(a) It isn't Fred who writes poetry in the garden.

(b) It is Fred who doesn't write poetry

in the garden.

(a)は“Who writes poetry in the garden?”という問いを想定するような場面での発言で否定は断定に含まれるのに対し、(b)は“Who doesn't write poetry in the garden?”という問いに対する応答で否定は前提に含まれる(太田: 252)。

## 8.2 No NP

(96) I will accept no reprisals.

(a) I will accept there being no reprisals.

(報復なしでよろしい)

(b) I won't accept any reprisals.

(どんな報復も受け入れない)

(97) No news is good news.

(a) 便りのないのが良いたより。

(b) どの便り(ニュース)もよくない。

(98) John would be happy with no job.

(a) John would be happy without any job. = John ... happy if he had no job. = With no job, John would be happy.

(b) John wouldn't be happy with any job.

= With no job would John be happy.

(96)~(98)の(a)は構成素否定でnoの作用はNP内部にとどまっており、(b)は文否定で、否定辞noの作用は文全体に及んでいる。<No NP>を含む文を後者のように文否定として解釈することが保証されるのは、<no NP>が文の述語の関数構造に関与するときで、関数構造に関与しない場合には必ずしも文否定の解釈にはならない(太田: 368)。

以下の4例はいずれも構成素否定で、<no NP>を含む文でも曖昧さが無い。理由は、noが字義通りの数量詞でなく、比喩的・慣用的に用いられているからであろう。

(99)(a) He'll be back in no time.

(b) To no purpose Tom beat his wife.

(c) I bought it for nothing.

(d) He stops at nothing.

(何もひるまない、平気で何でもする)

## 8.3 Nothing

(100) Nothing agrees with me better than oysters.

(a) Eating nothing agrees with me better than eating oysters.

(b) Oysters agree with me better than any other food.

(a)が構成素否定で、(b)が文否定であるが、いずれに解釈するかは文脈による。

(101) I expected nothing less than a cynical remark. [= (77); 再掲]

## 8.4 否定辞+数詞

(102) John didn't solve one of the problems.

(a) Jは問題のうち一つを解かなかった。

(b) Jは問題のうち一つさえも解かなかった。[oneに強勢]

(103) I didn't solve three of the problems.

(a) 解いた問題はたった三つではない。(I didn't solve three of the problems. I solved all of them.)

(b) 問題を三つも解かなかった。(I didn't solve three of the problems. In fact I solved none.)

問題を解いたこと自体ではなく、解いた問題の数を否定しており、しかも数詞が否定尺度に解される場合と肯定尺度に解される場合とがある。これは、会話の含意が関わる問題で、太田が詳しく論じているので同書に譲る(378ff.)。

## 8.5 否定辞+many

(104) The target wasn't hit by many of the arrows.

- (a) 的に当たった矢はあまり多くなかった。  
[ manyがnotの作用域にある ]
- (b) 矢の多くは的に当たらなかった。  
[ notがmanyの作用域にある ]
- (104)の能動態は(105b)ではなく、(105a)であるとしなければならない。なぜなら、受動態のnotとmanyの位置の左右関係は(105b)とではなく(105a)と対応しており、よって、否定辞とmanyの作用域も対応することになるからである。しかしこの点に関しては異論もある(太田: 357f.)。

(105)(a) Not many of the arrows hit the target.

(b) Many of the arrows didn't hit the target.

(106)(a) I told many of the men none of the stories.

(その物語をひとつも話してやらなかった人がたくさんいる)[構成素否定]

(b) I told none of the stories to many of the men.

(大勢の人に話した話の一つもない)  
[文否定]

(107) I haven't read as many as five books.

(a) 5冊もの本は読んでいない。[より普通の読み]

(b) 読まなかった本が5冊もある。

(106)は(63)で見たように与格交替変形(Dative Shift)適用以後の派生句構造で意味解釈を行わなければならない例を示すものであり(村木・斎藤: 154), (107)は8.4ですでに類似の例を扱った。

## 8.6 否定辞+all

(108) All men are not wise.

(a) すべての人は賢くない。

[ allはcollective ; VP否定 ]

(b) すべての人が賢いわけではない。

[ allはdistributive ; 文否定 ]

(=Not all men are wise. = It is not

(the case)that all men are wise.)

(109) John couldn't solve all of the problems.

(a) 全部の問題が解けなかった。

(b) 問題を全部解けたわけではない。

## 8.7 否定辞+any

(110) He doesn't lend his money to anybody.

(a) 誰にも金を貸さない。

[ [ lend his money to somebody ] というVPの否定 ]

(b) 誰にでも金を貸すわけではない。

[ [ he lends his money to anybody ] (誰にでも金を貸す)というSを否定 ]

次の二例は否定辞を含まないが、anyが疑問を含意する節と共起するとき、曖昧さが生じる例である。

(111) Can anybody swim the channel?

(a) その海峡を誰か泳げるものはいるか。

(b) その海峡は誰でも泳げるか。

(112) If anybody can swim the channel, I can do it.

(a) 誰か泳げる者がいれば、それは私だ。

(b) 誰でも泳げるのなら、私も泳げる。

<Any N>は、「Nの任意のメンバー」ないしは「任意の数量のN」を意味し、その指示物の存在は保証されない。(太田: 315)。

## 8.8 否定辞+PP

(113) He hasn't lived there for three years.

(a) そこに住んでからまだ3年にならない。

[ VP [ has lived there for three years ] の否定。“for three years”のforは省略できる。このPPはVP→VP PPのPPである]

(b) そこに住まなくなってから3年になる。

[ So [ he hasn't lived there ] (否定文)の継続期間が3年だといっているのであり、“for three years”はSo→So PP



のPPに当たり、否定を含んだ文全体にかかる]

(113)のPPは時間幅を表すものであるが、空間幅(距離)をあらわすPPも否定辞と共に起して同様の現象を呈する。

(114) He didn't walk for ten miles.

(a) 10マイルは歩かなかった。(8, 9マイルは歩いたかもしれないが)。

(b) 旅行中10マイルのあいだは歩かなかった(残りは歩いたが)。

(115) John didn't sleep until midnight.

(a) 真夜中までずっと眠っていたわけではない。

(b) 真夜中まで一睡もしなかった。

(Until midnight John didn't sleep. = Not until midnight did John sleep.)

(116) He didn't listen to you on purpose.

(a) It was not on purpose that he listened to you.

(b) It was on purpose that he didn't listen to you.

以上、(a)はPPがnotの作用域内に、(b)は作用域の外にあるという読みによって曖昧性が生じることを見てきた、ただし、(a)の読みでは、PPは否定辞notの焦点になるので、文尾で上昇調になる傾向がある。

(117) He didn't throw up his job (in order) to please his wife.

(a) It was not (in order) to please his wife that he threw up his job.

(b) It was (in order) to please his wife that he didn't throw up his job.

(118) I didn't go because I was afraid.

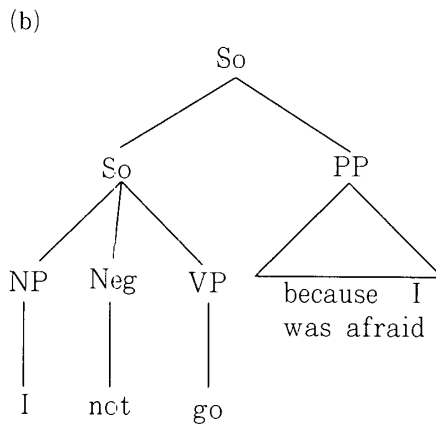
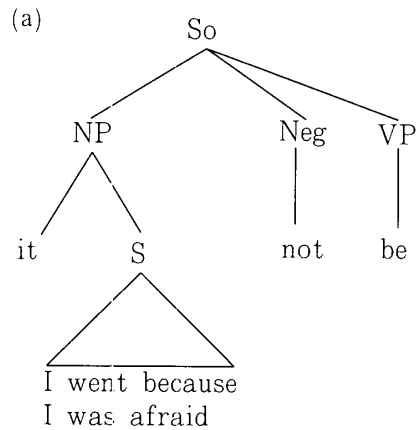
(a) 怖いから行ったのではない。

[S否定; VP→V PP]

(b) 怖いから行かなかった。

[VP否定; So→So PP]

(118)の樹形図を中島(下:78)によって示せば右記の通りである。



### 8.9 否定辞+数量詞×数量詞(頻度副詞)

頻度副詞も一種の数量詞と見なし、二つの数量詞が否定辞と共に起る際の、三者の相対的作用域のからみ合いによる複雑な意味解釈を以下に例示する。

(119) Not all of the students knew many of the answers.

(a) Some of the students didn't know many of the answers.

(b) There were many of the answers that not all of the students knew.

(120) Many people didn't show up on several occasions.

(a) On several occasions many people didn't show up.

(b) There were many people who didn't show up on several occasions.

(121) Not many people showed up on several occasions.

- (a) On several occasions few people showed up.
- (b) There weren't many people who showed up on several occasions.
- (122)(a) Not all people are always happy.  
=Some people are not always happy.  
=There are some people who are sometimes unhappy.
- (b) Not always are all people happy.  
=There are some occasions when some people are unhappy.
- (c) All people are not always happy.  
=(a) [notがallにかかるとする読み]  
=Nobody is always happy. [notがVPにかかるとする読み]
- (123) He usually doesn't speak for two hours.
- (a) ふつう 2時間しゃべることはない。  
[usually [doesn't][speak for two hours]]
- (b) 2時間口をきかないことがふつうだ。  
[usually [doesn't speak] [for two hours]]
- Cf. He doesn't usually speak for two hours.=(123a)[doesn't usually [speak for two hours]]

頻度副詞usuallyは、normally, generally等と同様、notの右に生じたときでもnotの作用を受けない。

Ex. The jewel isn't usually (usually isn't, is usually not) found in ordinary stores.

### 8.10 否定辞+(already, only, still)

- (124) He doesn't love her already.
- (a) もう彼女を愛していない。(Already he doesn't love her.)
- (b) もう彼女を好きになっている、ということはない。(It's not the case that he loves her already.)

(124a)ではalreadyの作用域のほうがnotの作用域よりもひろく、後者が前者に含まれている解釈で、そのことは括弧内のパラフレーズに表れている。(124b)の解釈は、誰かが“He loves her already”と言ったのを受けて、「おうむ返し」に否定するような場合に典型的に用いられるだろう。この場合、alreadyがnotの作用域に含まれることは文全体を否定していることから明らかである。

- (125) John doesn't only love Mary.
- (a) John doesn't love only Mary.  
[Manyに強勢を置き、上昇調]
- (b) John doesn't only love Mary. He also respects her, etc.

副詞onlyはその後に来るすべての構成素を焦点とすることができる。Maryに焦点を置けば(125a)の解釈を、loveに焦点を置けば(125b)の解釈をしていることになる。

- (126) John isn't here still.
- (a) Jはまだ姿を見せない。(John hasn't been here up till now.)
- (b) Jはもうここにはいない。(John isn't here any more.)

(126a)のnot hereはstillの作用域の中にあり[still [not [here]]], (126b)のstill hereはnotの作用域の中にある[not [still [here]]]。

### 8.11 否定辞+(and, or)

- (127) John and Bill didn't go to the store.
- (a) Either John didn't go to the store or Bill didn't go to the store.
- (b) Neither John nor Bill went to the store.

(127a)のように解釈するばあいには、(127)のandに強勢を置き文尾を上昇調にして、等位項の一方だけが否定されるという意味を明確にする。(a)のorは排中の、つまりどちらか一方だけが真であって、両方とも真になることはないという意味に解せられる。(127b)の読みのばあいは、andに強勢はなく、文尾も下降調で

ある。

(128) I didn't tell John or Bill those stories.

(a) I didn't tell John those stories and I didn't tell Bill those stories.

(b) I didn't tell John those stories or I didn't tell Bill those stories.

## 8.12 否定語彙

(129)(a) John didn't obey the law very often. (= Very often John didn't obey the law.)

(b) John disobeyed the law very often. (= Very often John disobeyed (=didn't obey) the law.)

(129 a)のvery oftenはnotの作用を受けるとする解釈が圧倒的であるが、(129 b)においては、very oftenは否定語彙disobeyに含まれる否定の作用を受けていない。

## 9 その他の事例

一つの発話に対して、音調を含むいわゆるかぶせ音素 (Suprasegmental phoneme) を付与することによって、様々にニュアンスの異なる意味を持たせることができる。この現象は統語構造に、異なった分析を施すことによって、多様な意味をさぐっている本稿の主旨とはややずれることになるが、一つの言語事実として、二、三の例を挙げておく。

(130) Who are you calling, Nancy?

(a) ナンシー、誰を呼んでいるの？

(b) 誰を呼んでいるの？ナンシーかい？

Cf. Who are you calling--your husband?

[曖昧さは生じない]

(131) The superintendent(.) says the teacher (.) is a fool.

(a) 校長は、その教師が思慮のないやつだと言っている。

(b) その教師は、校長が思慮のない人だと言っている。

(132) Would you like tea or coffee?

(a) ティーにしますか、それともコーヒーにしますか。

(b) お茶かコーヒーを召し上がりますか。

更に、意味は一義的であっても、異なった文化的価値を背負わされている表現があることも付言しておきたい。例えば(133)の類のものは、もちろん、本稿の守備範囲を越えるものである。

(133) A rolling stone gathers no moss.

## 10 結 び

「英語曖昧表現の諸相」という副題が示すとおり、曖昧さは語・句・文の各レベルにおいて、実に複雑多岐にわたっている。そのことは、文のレベルに限っても、前稿及び本稿の見出しや副見出しを一瞥するだけでも十分窺えるところである。この現象は格語尾を消失し、文法機能を専ら語順に頼っている英語の特性がしからしめるものであろうか。ともあれ、英語の曖昧表現をできるだけ様々な角度から筆者なりに示してみたいつもりである。曖昧さの分類の仕方や、切りとり方、視点の置き方、そして配列の仕方も、別の人が行えばまた違ったものとなりえたことであろう。

用例は引用文献から借用したが、なかんずく、中島(1980)、太田(1980)の両書に負うところが多かった。とくに後者は、否定表現をその曖昧さを含めてexhaustiveに扱っている点で、他に類を見ない。本稿など、それに比べれば否定表現の辺縁をなぞったに過ぎないものである。

## 引用文献

1. Blake, N.F. (1988) *Traditional English Grammar and Beyond*. Macmillan.
2. Close, R.A. (1981) *English as a Foreign Language: Its Constant Grammatical Problems*. (3rd ed.) George Allen & Unwin.
3. Copeland, J.&F. (ed.) (1965) *10,000 Jokes, Toasts & Stories*. Doubleday & Company, Inc.
4. Hirst, G. (1987) *Semantic Interpretation and the Resolution of Ambiguity*. Cambridge U.P.
5. Huddleston, R. (1988) *English Grammar: an Outline*. Cambridge U.P.
6. Hurford, J.R. & Heasley, B. (1983) *Semantics: a coursebook*. Cambridge U.P.
7. Jespersen, O. (1954) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, (Pts. II & V). George Allen & Unwin.
8. Kess, J. & Nishimitsu, Y. (1989) *Linguistic Ambiguity in Natural Language: English and Japanese*. くろしお出版.
9. Lewis, M. (1986) *The English Verb: An exploration of Structure and Meaning*. Language teaching publications.
10. Marquez, E.J. & Bowen, J.D. (1983) *English Usage*. Newbury House Publishers.
11. Meiers, M. & Knapp, J. (1980) *5600 Jokes for All Occasions*. Avenel Books.
12. Perkins, M.R. (1983) *Modal Expressions in English*. Francis Pinter.
13. Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. [CGEL] Longman.
14. Yule, G. (1985) *The Study of Language*. Cambridge U.P.
15. 安藤貞雄 (1983, 1985) 「英語教師の文法研究」(正・続) 大修館書店.
16. 石橋幸太郎編 (1973) 「現代英語学辞典」成美堂.
17. 梅田 巖・藤井健夫・石井丈夫・北 和明・竹村憲一 (1984) 「英語学の視界」昭和堂.
18. 太田 朗 (1980) 「否定の意味」大修館書店.
19. 大塚高信・中島文雄監修 (1982) 「新英語学辞典」研究社.
20. 郡司利男 (1961) 「英和笑辞典」研究社.
21. 田桐大澄編 (1970) 「英語正用法辞典」研究社.
22. 田中茂範編 (1987) 「基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ」三友社出版.
23. 田中春美編 (1988) 「現代言語学辞典」成美堂.
24. 中島文雄 (1980) 「英語の構造」(上・下) 岩波書店.
25. 中野清治 (1994) 「Syntactical Ambiguityについて(1)」『高岡短期大学紀要』第5巻.
26. 村木正武・斎藤興雄「意味論」(1978) (現代の英文法第2巻) 研究社.
27. 安井 稔 (1983) 「意味論」大修館書店.

## On Syntactical Ambiguity (2)

– Varieties of Ambiguity of English Expressions IV –

Kiyoharu NAKANO

(Received October 26, 1994)

### ABSTRACT

This paper, as in the previous one (*Bulletin of Takaoka National College*, Vol.5), deals with ambiguity of English on the sentential level, which is caused by different factors, such as referential scope and its focus, combination of one quantifier with another, interaction of negatives on quantifiers/adverbs, etc. There are also sentences where it is difficult to decide whether the connectors used in them are conjunctions or relatives.

This is the last of my four serial papers dealing with various aspects of ambiguity of English expressions.

### KEY WORDS

Ambiguity, Quantifier, Referential scope, Comparative, Trace, Structural preference, Negation, Relation